

人間の意志は傾向性からの影響を免れることはできない。しかし依然として、その意志が実践理性によって規定される可能性、すなわち人間みずからが立法した道徳法則にみずからしたがうという意味での自律の可能性は残っている。カントはこのことを『実践理性批判』のなかで「理性の事実」(V31) という理説によって示した。同著では、最上善（道徳的完全性）の実現のために魂の永世が、最高善の実現のために神の現存が要請されるが、これらはいくまで人間の自律を促すために要請されるのであり、信仰を援用するものではない。

ところがその後、カントは『たんなる理性の限界内の宗教』（以下『宗教論』と略記）でどんな善良な人間にも見出される根元悪を指摘する。道徳法則の遵守よりも傾向性の満足のほうを優先する格率を採用しようとする性癖である。人間性に根を張る根元悪を根絶することはできない。だとすれば人間にとって、外から見て義務に合致するだけの「行儀のよ」さを超えて、義務に基づく行為をなしうるほど根本から「道徳的に善」くなること、真の意味での自律は可能だろうか（VI30）。だが、「一点の曇りなき道徳的な心のあり方」（VI61）をもった人間が現にいたという信仰があれば、人間はそういう生き方が私にもできると励まされる。道徳的完全性を具現する人間とは「神の御子」イエスに他ならない。イエスへのこの信仰は、歴史的事実や恣意的な規則に基づくものではなく、人間が実践理性を介して知る道徳法則にしたがった生を送るようのみずからを促すためのものであり、カントはこれを「理性信仰」（VI104）と呼んだ。カントがたんなる理性の限界内の宗教の文脈で語る信仰は、人間が現に自律するのを阻むどころか、むしろそれを促進する鍵としてはたらくわけである。この信仰に励まされた人間は、みずからの「心に定めた企図とこれまでのみずからの生き方とを比較」し、そこからみずからの生き方に「心のあり方の根本的な改善を推論する契機」を見出すことで、そこからさらに前進を続ける力を得る。こうして人間は「求められている純粋な心のあり方」を保持し、みずからが道徳的完全性へと前進を続けられると「信頼 *Vertrauen*」することができる。この自己への信頼がさらに、人間が道徳的完全性へと歩み続ける力となる（VI68）。

しかし、自己への信頼が自己欺瞞でない保証はどこにあるのだろうか。『道徳形而上学』「徳論の形而上学的定礎」に語られる悪徳のひとつ、「内的嘘言」（VI430）はまさにそこを突く。すなわち人間は、みずからの行為がたんに義務に合致するだけの行為であることを意識しつつ、それがあたかも道徳的完全性への努力であるかのように、すなわち義務に基づく行為であるかのようにみずからを誤魔化そうとしかねない。しかしなお、人間にとって自律が義務であり、したがって可能である以上、それを促す自己への信頼は自己欺瞞のない仕方で生じてくるのでなければならない。本発表が目的とするのは、人間はいかにしてその行為の源泉をめぐる自己欺瞞を暴き、もっともな仕方で自己を信頼しうるのかを明らかにすることである。手がかりとなるのは、上述の内的嘘言と同じ章で展開される「内的法廷の意識」とも呼ばれる「良心 *Gewissen*」にかんする論と「道徳的自己認識」の命令である。『宗教論』を参照しながらこの箇所を解釈することを通じて、人間の道徳的努力と自己への信頼の関係を整理し、カントの思想体系における道徳哲学と宗教論との関係性の理解に向けた一歩としたい。